服はかさばる。ましてや、人間ひとりの冬服の一揃いともなれば。おまけに靴まで買ってしまった。

そこまではいい、まだ。

問題は、バス停から家までが遠いということだった。

冬花は両手に大きな荷物をかかえ、冷たい北風に吹かれながら、のろのろと家への道を歩いてゆく。道のりの内訳は、バスの通っている街道を五分、街道からの横道を五分。冬花がいま歩いているのは街道である。

ようやく横道に入ったところで、冬花は、このあたりでは珍しいものを見つけた。

人がいる。

車はともかく人はめったに通らない道である。冬花がこの道をときどき歩くようになってから半年ほどだが、そのあいだ、人を見たことがなかった。

女の子で、歳は十五歳くらいだろうか。ガードレールのそばに、車道のほうを向いてしゃがんでいる。なにかを眺めているらしい。

なにを眺めているのだろうと思いながら近づいてゆくと、それが見えた。

狸の死体だった。

女の子は、冬花の存在に気づいていないのか、ずっと振り向きもせずに死体を見つめている。

冬花は女の子のそばで立ちどまり、荷物を地面に置いた。女の子の横に、そっと並んでしゃがむ。

これほど近くまで来ているのに、冬花のことに気がついていないとは思えない。それでも女の子はじっと死体を見つめている。

冬花は女の子の様子を観察した。

服装が、黒いコート、黒い靴、黒い靴下と黒づくめだ。そのせいか、肌が雪のように白く見える。うつむいているせいで顔はよく見えないものの、かなり整った顔らしい。

人通りのない道で、動物の死体を見つめる女の子。まともな子とは思えない。関わり合いにならないほうがよさそうだ。

そう思いながらも冬花は言った。

「なにしてるの？」

女の子は顔をあげ、冬花を見た。
ややつり目ぎみの目が、まっすぐに冬花をとらえる視線を放つ。野生の獣のような目だと冬花は思った。冬花を恐れず、怪しまず、ただ何者かを見極めようとしている。
「これを見てるの」
女の子がそう言った瞬間、冬花と女の子のまわりの空間を、見えない壁が覆ったような気がした。
街道を横に曲がったばかりのこの場所は、街道を通る車の音がかなり聞こえてくる。その音が、遠くなった。もちろん物理的に音が小さくなったのではなく、意識に入り込まなくなった。
あたりをしんとさせる声――もしそんなものがあるとすれば、女の子の声はまさにそれだった。
「どうして？」
自分の舌がひどく重いのを感じながら、冬花は尋ねる。
舌が重い理由はわかっている、緊張しているせいだ。ただ、なぜ緊張しているのかはわからない。
「私ももうすぐこうなるから」
女の子は狸の死体に視線を戻した。
おそらく車に跳ねられたのだろう、狸の死体には、目につく外傷はない。ただ、口から流れ出ているわずかな血と、なによりもそのたたずまいが、死を静かに語る。狸は、かつて狸だったものは、驚くほど確かに死んでいる。
「こうなる、って？」
――自殺。
それしか考えられない。
しかし、
「エントロピーって知ってる？」
いきなりのことに面食らいながらも冬花は、
「…乱雑さ、だよね。
コーヒーと牛乳を混ぜたら混ざる一方で、コーヒーと牛乳に分かれたりしないのは、ほっとくとエントロピーは増えるだけで減らないから、って話だよね」
冬花の答に一応は満足したのか、女の子は、あたりをしんとさせ

る声で話す、
「生物は、外側と内側に分かれてるの。単細胞生物なら細胞膜がその境界。狸なら毛皮が境界。
ほうっておくと、外側と内側は混ざって同じになる。エントロピーは増えるだけで減らないから。だから生物は、内側から外側にエントロピーを汲み出さなきゃいけない。そうやって内側を内側として保つの。
エントロピーを汲み出す仕組みが止まると、その生物は死ぬの」
「…難しいこと知ってるのね。小さいのに偉いな」
「生物はいろんなレベルでエントロピーを汲み出すの。この狸の全身はもうエントロピーを汲み出せないけど、細胞はまだ汲み出してる。人間は文明を作って、環境ごとエントロピーを汲み出してる。
種にとっては個体の死は、エントロピーを汲み出す仕組みの一つ。だから狸には寿命があるの。
単細胞生物の個体には寿命はないわ。分裂しつづけて、運がよければいくらでも生きてゆける。単細胞生物は、寿命という仕組みを使わないし使えないから。
自分が単細胞生物だったら、って考えたことはある？」
「…ない」
「私も。私が単細胞生物だったら、どんな気持ちがするものかしらね」
「…死のうなんて考えちゃだめだよ」
冬花は思いきって言った。
「いつだって方法はあるんだから。よかったらお姉さんに話してみて？　力になれるかもしれないよ」
女の子はふたたび顔をあげて、冬花を見る。
さっきの、相手を見極めようとするだけの目とは違う。いくぶんかの暖かい感情と、問いかけるような気配がある。
「そんなこと考えてない。でも、たぶん、ありがとう」
その返事はきっと本当のことだろうという気がした。もし死ぬつもりなら、嘘をつかずに認めるはずだと、なぜか冬花は確信している。
「たぶん、って？」

「お姉さんがどんなつもりか、わからないから。いけない？」
「いいよ。…さっきの、ちょっと変だったかな」
でも後悔はしていない。言わずにいたら、きっと後悔していた。
「そうかもね。でも、いいと思う。
お姉さん、この人見たことある？」
女の子はポケットから一枚の写真を取り出して、冬花に渡した。
まるで証明書の顔写真のような、背景のない顔だけの写真には、高見沢郁恵が写っていた。
冬花は写真を返して言う、
「…女優かなにか？」
とぼける演技には少し自信がある。驚いた気配ひとつさせていないはずだ。
高見沢は犯罪者で、地球に逃げてきたのだという。なら高見沢を追ってくるのは、犯罪の関係者かそれとも警察か、いずれにしろ高見沢にとって好ましくない相手である可能性がきわめて高い。
「知らないんならいいの。
さようなら。お姉さんのこと忘れない」
女の子は微笑んだ、というにも足りないくらい、ほんのわずかな表情を浮かべた。けれどそれは笑っているのだと冬花にはわかった。
「さよなら。覚えてなくてもいいけど」
「そうね」
街道のほうに向かって、女の子は歩いてゆく。冬花とは逆方向だ。
あとを追いかけようかと一瞬思う。
ただ、追いかける理由がない。まさか、『あなた宇宙人ね？』とは訊けない。高見沢のことを思えば、立ち去ってくれたのは天の助けだ。
なにか、ひどく大切なことを言い忘れているような気がする。なにを言い忘れているのか、どうしても思い出せない。